h1

本間桃山古陶

無作為の美

HONMA

An Uncontrolled Expression of Art

SHINICHI

h4

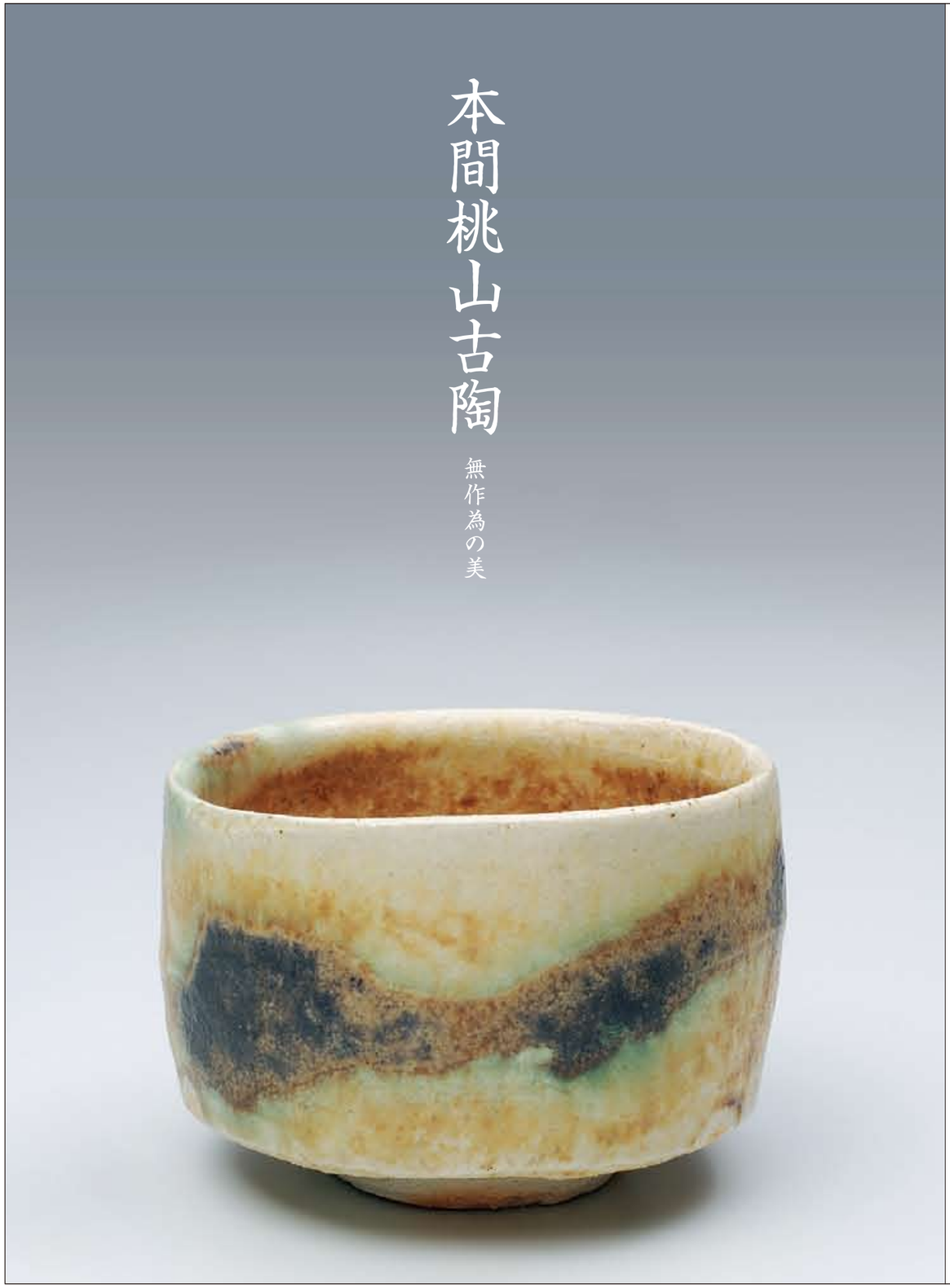
自然湯蹲花生　Vase(H/12㎝ D/16.5㎝)

◀ 表紙写真/自然湯壺
Vase(H/36.5㎝ D/38㎝)

2010年5月1発行　企画・編集・撮影/(有)杜の未来舎　デザイン/畠山敏デザイン事務所　印刷・製本/ダイコロ株式会社

本間桃山古陶

無作為の美



土の器に永遠の美を求めて

昭和の初め、荒川豊蔵に始まる桃山陶器の復興は、たんなる様式の模倣以上の日本陶芸の本質的な力を掘り起こす契機となった。本間伸一氏の歩みも、備前・萩・志野等の表層的な枠に縛られず、桃山陶器に見られる日本陶器の永遠の美を志向しながら、幾多の技法を会得し独自の作風を確立するための試行錯誤の孤独な道のりであった。それにふさわしい舞台として若き日の本間氏が選んだのが、岩手県藤沢の僻遠の山中であり、北上川の土、奥羽山系の赤松を用いて、炎との格闘の中から、桃山古陶さながらの深い趣きを宿した作品が生み出されてきた。その精華は、火の力に委ねた焼き締めならではの豊かな表情と、シンプルさの中に力強さと優しさを秘めた独特のフォルムによって、内面的な存在感が見る人を圧倒する作品である。

桃山人が生きていた大航海時代のおおらかな空間をも感じさせる作品は、作為を超えた美しさによって私たちの魂を揺さぶる一方、私たちの普段に仕え、喜びを与える道具としての謙虚さも合わせ持っている。

In pursuit of creating ceramics inspired by the underlying aesthetic ideal of existence in Momoyama ceramics.

The revival of the Momoyama ceramics, which was began by Toyozo Arakawa at the beginning of the Showa era, made us recognize the strength of Japanese ceramic art. Furthermore many ceramists who were attracted to this art which lead to an artistic creativity beyond the mere imitation of existent styles that was for only commercial purpose. This historic stream also had an influence on potter Honma and his works. Aspiring to reach to the eternal beauty of Japan ceramics, he has continued the process through trial and error. It means to establish an original style without being bound by traditional categories of Japanese ceramics such as Bizen, Hagi, Shino and so on.

Honma in his young days chose the place in the mountains of Fujisawa of southern Iwate prefecture as a suitable location to approach to the ideal, where he built Momoyama styled kiln'Anagama'. This place has easy access to both clay from Kitakami River and Japanese red pine growing in Oou cordillera. And there he has generated ceramics distilling the essence of Momoyama ones for nearly 40 years.

The distinctive feature of his works lies in unique forms that are structually simple and therefore of impressive charisma. He prefers natural ash glaze which forms surfaces with an extremly ascetic atmosphere. The works might let you feel the tolerant space of the Great Navigation Age that Momoyama persons lived in. Although the potteries have the profound beauty beyond the artificiality that shakes our soul, they have the modesty to serve as daily necessities.

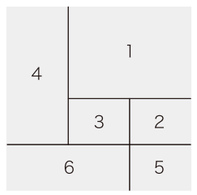
左：黄瀬戸茶碗　Cup(H/8.7㎝ D/11.7㎝)

岩手・縄文の風土から

藤沢野焼祭

毎年お盆の季節に開催される藤沢野焼祭は、昭和51年、本間伸一氏の提唱により、実践考古学者の塩野半十郎氏の指導を仰ぎ、露天で焼き上げる縄文土器の手法を試みたのに始まります。16基もの窯から一斉に燃え上がる炎は感動的で、岡本太郎、池田満寿夫、辻清明など著名な芸術家も魅了しました。

平成18年には、参加型の祭りが評価され、第10回ふるさとイベント大賞の優秀賞を受賞しています。



1-3：岩手県藤沢市の野焼きにて
3は祭りの常連、ピアニストの佐藤洋子（故池田満寿夫氏夫人）さんと
4-6：せんだいメディアテークにて本間伸一陶展「永遠なる桃山」（2007年）

日本陶芸の精華を伝えて

２００４年ドイツ・チューリンゲン州のゲラ応用美術館で１２０点を出展して開催された「自然との協和」と題する個人展でも深い感銘を与えました。

焼締窯変耳付花生　Vase(H/29.5㎝ D/14㎝)

Biography:Shinichi Honma

本間伸一 略歴

1948
宮城県小牛田町生まれ
1972
岩手県藤沢町に築窯
藤沢焼の窯元となり作陶を始める
1974
仙台丸光デパート(現・さくら野)にて個展
(以降1988年まで毎年)
1975
岩手藤沢野焼祭を提案
以来実行委員として関わる
1977
新宿京王百貨店にて個展(以降1998年まで毎年)
1988
大阪梅田阪急にて個展
1991
銀座松屋にて個展
1998
盛岡川徳デパートにて個展
2002
山形大沼百貨店にて個展販売(以後毎年)
2003
ギャラリー土夢にて二人展(絵：本田健)
2004・9〜11
ドイツ・ゲラ応用美術館にて「現代日本の陶芸家　本間伸一展」
ドイツ・レンツキルヒにて二人展(絵：F・エルヴァンガー)
大阪梅田阪急にて個展
2005
ギャラリー土夢にて個展販売(絵：本田健)
東北工業大学一番町ロビーにて本間伸一・文江親子二人陶芸展
2007
せんだいメディアテークにて本間伸一陶展「永遠なる桃山」
2008
一関閑雅亭にて還暦記念展「無作為の彼方へ」
仙台藤崎デパートにて個展
せんだいメディアテークにて「本間伸一・文江二人陶展」
2009
東京銀座松屋にて親子二人陶展

桃山古陶さながらに

焼締掛花入　Vase(H/15㎝ D/11㎝)

岩手の草深い山里、藤沢町深萱に穴窯を築き37年、天賦の才に加え、桃山陶工の心技に迫って試行錯誤を重ねる中、桃山期の優品さながらに存在感豊かで大らかな「本間桃山古陶」が生み出されてきた。

自然釉小壺　Vase(H/19㎝ D/18㎝)

無垢の風情に酔う

灰釉斑紋鶴首花入　Vase(H/27.5㎝ D/13㎝)

「本間のかたち」と賞揚される素にして優美な造形の妙、自然釉の織りなす「景色」に彩られた無垢の風情は、桃山古陶の美の本質に迫る。

自然釉扁壺　Vase(H/15.5㎝ D/12.5×7.5㎝)

永遠の面影

焼締筒花生　Vase(H/37㎝ D/13.5㎝)

焼締脚付長角皿　Dish(H/16.5㎝ B/76㎝ D/29㎝)

焼締深鉢　Bowl(H/13㎝ D/47㎝)

「用の美」の謙虚さを纏って

無作為な趣きの器は、暮らしの中で慈しみ用いられてこそ輝きをます、「用の美」としての謙虚な姿でも魅了する。

○○○○○○　○○○○(H/4㎝ D/34×15.5㎝)

焼締長角皿　Dish(H/4㎝ D/34×15.5㎝)

長石釉ねじり梅皿組　Dish(H/2.7㎝ D/14㎝)

焼締山茶碗　Bowl(H/6㎝ D/34×15.5㎝)

鉄釉割山椒　Bowl(H/9.5㎝ D/18.5㎝)

粉引八寸角鉢　Dish(H/3.5㎝ D/24㎝)

焼締丸皿　Dish(H/2.4㎝ D/27.5㎝)

焼締長角皿　Dish(H/2.5㎝ D/19×11.5㎝)

粉引小鉢　Bowl(H/6㎝ D/11㎝)

「器は使った時に映えてこないものはだめだと思っています。私自身台所に立つのが好きで、作る時には盛るものをイメージしていることが多いのです。生活の器であることを基本に、空間や時間に耐えられるものを作り続けて行きたいと思います」。

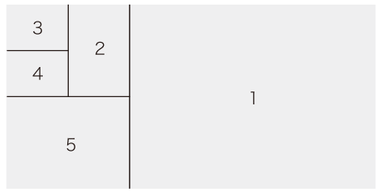
こう語るように本間のふだん使いの器には、民藝運動の創始者柳宗悦が説いた、生活に謙虚に使えることから生まれる「用の美」が見てとれる。

自ら料理も手がける本間の作った器は盛り合わせをしたときに、いっそうその真価が輝く器である。

日常の蕪雑な料理でも受け止めてくれる懐の大きさがある一方、その無作為の美において優れた料理人にインスピレーションを与え、創作魂を鼓舞し続ける器でもある。

火炎の力に委ねて

北上川の土、奥羽山系の赤松を用いて、ときに一週間以上に及ぶ炎との格闘の中から、桃山古陶さながらの深い趣きを宿した作品が生み出される。



1：窯たき
2：成形
3：窯たきは昼夜兼行で
4：住居およびギャラリーである移築民家（築約250年の古民家）と手あぶり猫
5：窯出しのとき

窯の力にゆだねきるおおらかさ

本間さんが作られる器は、自意識を削ぎ落とし窯中の灰釉に造形美を委ねきる姿に見事なものがあります。自然釉の焼締をライフワークにされて、素朴に徹して焼成する自然体が作品に移り美を発散している点が魅力となっております。人の力を超えたところで生まれる美は作家の創造性を否定することにもつながる悩ましさがありますが、本間さんの仕事は、無為自然、意識を捨て切って窯の力に委ね切るおおらかさを感じさせます。民藝の考え方の根本では「本当の美は生まれるもので、つくり出すものではない」としております。物づくりに手仕事のよさを重視しながらも作家意識の独りよがりに陥ることを戒めています。民藝の精神は物づくりにあたって用途としっかり結び付く心の働きを強調しております。本間さんは無意識の民藝的作家であると思っております。

福本　稔
（元日本民藝協会専務理事）

本間伸一 作品の形と質感

本間さんは、長石釉や引出し黒なども用いるが、多くは灰釉、自然釉ないし焼締めによる、極めて禁欲的で素朴な表面感情を持った作品を得意とする。そのフォルムも極めてシンプルで、幾何学的、構築的な、強い印象を与えるものである。フォルム、質感、双方が共鳴し合い、彼独特の世界を作り出している。

そして何よりもその作風の骨格を作り出しているのは、力強い土の構築の迫力である。

焼き物は土の構築のパワーで勝負する芸術である。そのためには様々な体験によって土の性質や焼成の特質を十分把握していかなければならない。本間さんの作品を見るとそれがうかがえる。

金子　賢治
（東京国立近代美術館　工芸課長）

引出黒面取茶碗　Bowl(H/92㎝ D/120㎝)

作ゆかそ思力内まきか

かたちをシャープに
きれいにということは
まったくなくて、
内面的なものを感じる
力強く存在感あふれる作品にしたいと
思っています。
そのため轆轤のスピードを
かえって遅くしながら、
ゆっくり時間をかけて
作っていきます。

藤沢焼粉香木窯　本間　伸一